

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

夏の日だった。

夏の家の店には、七夕の飾りが出ている。

笹に飾られた色とりどりの短冊、吹き流し、星飾り、網飾り。

夏は毎年、母親と一緒にそれらの飾りを作った。はじめは自分の楽しみにやっていたことが、数年前からは両親のための店の手伝いに変わった。近所に外国人観光客向けのホテルがあり、その宿泊客がよく来店するから、四季折々の和風の飾り物は喜ばれた。

そんな事情で、七夕が世界共通のイベントではないことを、夏は幼いころから知っている。しかし、母が作った提灯などは、切り込みが不ぞろいすぎて、見るからにブカッコウ。

「なっちゃんはどうまいねえ」

そう言われるたび、喜ぶようなことでもないのに、素直な夏は得意になってしまう。

ところで、よく勘違いされるが、夏は冬生まれだ。

両親とも冬よりも夏を愛していたので、そういう名前になった。それを聞いたとき、なんとなく自分を否定されたような気分になるものの、正直なところ夏も冬より夏が好きだったので、「まあ、いいか」というところに落ち着く。

夏の家は小さなカフェを営んでいる。店の名前は「VertVert」。若いころはバックパッカー（大きな荷物を背負って自由に旅行する人）で世界中を旅していた夏の父親が、フランスのパリの街中にあるようなカフェをイメージして店を作った。パリは夏の母親が好きな街だ。

Vertはフランス語で緑という意味で、店のカンバンやナイスウには緑色が使われている。夏は色の中では緑がいちばん好きだ。

料理を父親が作り、デザートは母親が作る。「うちのシェフ」「うちのパティシエ（洋菓子職人）」。店にいる時、両親はおたがいをそう呼んだ。夏は「うちの夏」だ。夏はいつか勉強をして、「うちのバーテンダー（酒類の調合人）」もしくは「うちのソムリエ

（ワインを選び、提供する人）」「そうでなければ「うちのバリスタ（コーヒーを提供する人）」になりたいと、ぼんやり考えている。

十歳の夏、その店で夏は百花と出会った。

もうかなり遅い時間で、店内には他の客はだれもいなかった。閉店まであと三十分というところで、三人は店に入ってきた。ホテルのフロントで紹介されたのだという。百花の家族はそこに宿泊していた。

ひげをはやした大男と、髪の毛の短い細身の女性、そして夏と同じ年くらいの女の子。おそらく三人は親子だろうと、夏は予想をした。顔や雰囲気がよくにている。

カウンター席でこっそりと宿題をすませた夏は、そろそろ二階の自分の部屋にもどろうと思っていたところだった。夏の部屋にも勉強机はあるが、ひとりで部屋にいろいろな誘惑に負けるので、店が空いている時はいつもここで勉強する。

三人はたしかに日本人に見えたけれど、なんとなく日本に慣れていないように夏には見えた。たとえば視線の動かし方や、メニューを手取る動作などが、いつもこの店に来ているような外国人観光客たちのそれと、よくにている。

そして夏の勘は当たっていた。三人は海外からの旅行者だった。父親と思われるひげ男が、遅い時間の来店を詫言るように、「うちのシェフ」に向かってそのように伝えた。シェフが尋ねると、国の名前も口にしたのだが、聞いたことのない国名だったので、夏は一度では覚えられなかった。なるほど、それならば、外国人観光客向けのホテルを利用しているという点にも、納得できる。

だが、その国名を聞いたとたん、夏の両親は息をのんだ。

「それはまた、なんというか、大変なところから」

とうさんはそう言葉を濁した。かあさんは黙ったまま、なぜか夏の肩を抱き寄せる。

「物心がついてから、はじめての日本なんです」

「そう、機会がなくて」

夏の両親に向かって、なぜか言いわけでもするように、男女は口々にそう言った。物心がついてから、というのは、女の子の話だろう。

②「どちらを観光……、いや、どちらに滞在されますか？」

夏の父親の問いかけに、ひげ男はひかえめに「東京と京都に」と答えた。夏たちのいるこの街には、親せきがいるために立ち寄ったらしい。これから一週間ほどかけて、東京と京都を見て回ったあとで、またここにもどる予定なのだという。体のわりに声が小さい人だな。夏はそう思った。

親たちがそんな話をしている間に、夏はつまらなそうにしている少女に声をかけた。子どもの客が退屈そうにしている場合はそのようにふるまえると、父親からシドウ⁴されていた。

「今、何年？　ぼくは五年」

少女はボタンのように目をまるくして、席に座^{すわ}ったまま夏を見上げた。質問に答えようとしない少女を見て、夏はある可能性に気がつく。外国育ちということなら、日本語が話せないのかもしれない。

「えーと、Do you speak English? (英語は話せますか?)」

夏は英語が得意なほうだ。両親が店で外国人の客相手に英語を話すのを、小さなころから聞いて育った。それに、夏が英語を話す、外国人は喜ぶことが多い。夏は人を喜ばせるのが好きだ。

ところが、

「英語は苦手よ」

きっぱりと日本語で返されて、「あ、そう」と拍子抜けした。^③じゃあさつさと答えろよ。ばかみたいじゃないか。

「名前は？　ぼくは夏。春夏秋冬の夏」

「あたし、百花。百の花でモニカ。シユンカシユートーってなに？」

「……四季のこと。百の花でモニカ？　かわっ……」

変わってる、と言いつうになつて、

「かわいいじゃん」

と、言い直した。クラスで女子にそんなことを言ったら大スキャンダルだけど、これはあくまでも接客サービスだ。

「あたし、行ってない、学校」

「え？」

「だから、学校には行ってない。それに来週からは新しい島で暮らすのよ。安全なところ。どこにあるかは秘密なの」とまどう夏に、百花の母親が言った。

「わたしたちのいた国でね、戦争みたいなことが始まるかもしれないの」

戦争^④。夏は顔をしかめるしかできない。最近テレビでよく見る、ミサイルや爆弾^{ばくだん}や戦闘機^{せんとうき}をイメージする。三人は自分たちの国から逃げてきたのだろうか。

そこから親同士が国交と政治の話を始め、夏にはついていけなくなった。政治の話ができるのが大人の証拠^{しやうこ}だと、夏は信じている。

「もう食べないの？」

皿に残された料理を見て、夏は百花に尋ねた。百花はうなずいて、すまなさそうな顔をして、「すごくおいしいけど、多すぎる」と答えた。百花の頼^{たの}んだ魚料理は、店でいちばん人気のあるメニューだ。

百花は、かなりのやせっぽちだった。異国育ちであることが関係しているのかどうか、どことなく謎^{なぞ}めいたような個性的な魅力^みがあり、それに百花というふしぎな名前はよくニア⁵っているようにも思えた。茶色い瞳^{ひとみ}、ごわごわした黒くて長い髪、ぽつぽつした唇^{くちびる}。そして、まわりとは別のテンポで生きているような独特の雰囲気。

「これ、なあに？　おいしいのね」

百花が興味を示したのは、グラスに注がれた白い水。

「え、カルピス^(乳酸菌飲料の名まえ)だよ。知らないの？」

「知らないわ」

知らないわ。そんな言葉遣いをする同じ年の女の子を、夏はほかに知らない。

「うちはかき氷もカルピスの味なんだ」

「カキゴオリってなに？」

「それは、氷のデザートみたいな。今度食べにすれば」

この店でかき氷は「しろくまさん」と呼ばれている。バニラアイスと干し葡萄と杏子とで、さらさらの氷の山に白熊の顔を作った、カルピス味のかき氷。夏はそれを百花に見せたいと思った。喜びそうな気がしたので。

すると百花は、興奮気味な声色で、そして夏の知らない言語で、母親に何かを訴えた。どう聞いても英語ではなかった。日本人と同じように、外国人だって全員が英語を話すわけではないのだという当たり前のことを、夏は思い出した。そして、三人が外国人なのか日本人なのか、自分はよくわかっていないということに、夏は気がついた。

「そうね、来週、またここにもどるから」

母親が百花にそう答えた。きつと百花は、もう一度この店に来たいと言ったのだろう。

「来週もまだあるよね？ しろくまさん」

夏が聞くと、シェフが答えた。

「夏が終わるまで、あるよ」

ごくごく、のどを鳴らして白い水を飲む百花の横顔を、夏はじつと見ていた。

6
ヨクジツ、夏は百花が住んでいた国のことを調べた。舌を噛みそうな名前の国名を、間違えずに言えるようになるまで、少し時間がかかった。

「百花たちは、難民なの？」

クラスの女子を下の名前で、しかも呼び捨てすることに、夏は抵抗がある。でも、百花の名前には、なんとなく呼び捨てがテキ

していると思った。両親と同時に知り合い、全員が同じ名字のところに、百花だけを名字で呼ぶのは妙だし（そもそも彼らは名字を名乗らなかった）、「百花ちゃん」は百花の雰囲気合わない気がした。それで、百花。

「難民って、どういう人たちのことか、知ってる？」

かあさんが夏に聞いた。

「……その国にいるとあぶないから、逃げてきた人？」

「そうなんだけど、その理由が定められているの。サイガイや人種差別や紛争や政治的な問題で、命がキケンだから、自分の国を離れなければならなかった人たちのこと。世界に何千万人もいるのよ。その半分は、あなたみたいな子どもなの」

「自分の国から、どこかよそへ避難するっていうこと？」

「そう。自分の国っていうのは、その国の国籍を持っているっていうことね。あの人たちは三人とも日本人なんだから、この国に逃げてきたんじゃないかって、もどってきたわけでしょう。それは難民とは言わないよね。外国に長く住んでいたとすれば、そういうのは『移民』というのかしら」

夏は移民と難民を同じようなものだと思っていた。世の中には知らないことがたくさんある。

「じゃあさ、百花が学校に行っていないのも、それと関係してる？」

そうね、と、かあさんはうなずいた。

「通学できるような状況じゃなかったのかもしれないね。でも、おかあさんが先生なんだって。だから家で勉強していたんじゃないかしら」

百花は「春夏秋冬」や「かき氷」を知らなかったけれど、日本語はカタコトではなく流暢に話していた。母親から習ったのかもしれないし、日本語を話す両親と暮らしていれば、自然と身につくものなのかもしれない。たとえば夏が両親から英語を学んだのと同じように。

「これまではご夫婦でね、ツウヤクなんかの仕事をしながら、貧しくて教育を受けられない子どもたちをサポートするような活動

をしていたんだって。だけでもう国にいられないからって。とてもつらい決断だったって、言っていたわ」
「なにが、つらいの？」

「大勢の子どもたちをおいて、ここに逃げてきたことが」

夏はその夏、例年よりもカルピスをよく飲んだ。これは百花の影響だ。カルピスが日本の飲み物だということを、夏はじめて知った。カタカナの名前だから、コーラやジンジャーエールと同じように、もとは外国のものだと思っていた。

外国には百花のようにカルピスを知らない子どもがいる。これは夏にとって大きな発見で、突然カルピスが世にも素晴らしいもののように思えたのだった。

それに、カルピスを飲む百花の横顔は、それと同じくらいに、いや、きっとそれ以上に、なんとも魅力的だった。

一週間ほど経って、百花は再びやってきた。夕方、夏は友だちと遊んだ帰り、自転車を店の脇に止めたところだった。

家に向かって自転車を走らせていた時から、店の前に百花がひとりで立っていることには気づいていた。けれどあえてはしゃいだりせず、そこに百花がいることは大したことではないようにふるまった。

「あ、この前の」

⑥ せりふのしらじらしさに、思わず赤面してしまいそうになる。それでも百花は笑ったりせず真面目な顔で、

「百花よ」

と言った。

知ってる。夏は心の中でそう答えた。

「あのね、明日発つ」

「立つ？ なにが？」

「あたしが」

「……ああ」

なんだ、別れを告げに来たのか。夏は多少がっかりした。

「もうここには来ないよね？」

「たぶん」

「そっか。……あ、食べる？ しろくまさん」

「うん」

百花はにこっと微笑んだ。こういう笑い方をすると、夏は百花の笑い方が好きだと思った。クラスの口うるさい女子のよ
うに、口からぼんぼんと感情が飛んでこない。百花が「しろくまさん」をととても楽しみにしていたことを、その微笑みを見て夏は知った。

「百花ちゃん、短冊はもう書いた？ 明日は七夕だよ」

夏が手を洗っている間に、とうさんが百花に聞いている。VertVertではランチタイムとディナータイムの間に二時間の休憩が入るが、今はちょうどその時間帯だった。今夜はかし切りでパーティーの予約が入っている。かあさんが今朝、パーティーコース用のデザートにケーキか何かを焼いていたことを、夏は思い出した。テーブルの上に並んだたくさんのお皿を、百花はものめずらしそうに見ている。

「願い事を書くんでしょ？」

「そう。まだ向こうに短冊あったよな。持ってきてあげて」

夏はとうさんに言われるまま、店と自宅をつなぐドアから移動し、ペンと短冊を持ってきた。

百花に手渡すと、百花は口を結んだまま、もう一度微笑んだ。

「夏は？ なんて書いたの？」

百花に聞かれた。はじめて名前を呼ばれた。名前を覚えてくれていたことと、呼び捨てされたことに、夏はドキドキしてしまう。
「な、内緒」

しつこく聞いてくるかと思ったけれど、百花はそうしなかった。そして、それはひどく百花らしいと思った。
願い事を知らないように、百花は外国語で文字を書くかもしれない。夏はそう思った。でも、その予想は外れ、百花は日本語で願い事を書いた。

『世界平和とカルピス 百花』

青色紙で作った短冊に、百花はそう書いていた。^⑦ クラスの女子に多い、まるくて小さなくせのある文字ではなくて、大きくて勢いのある、流れるような文字だった。

「世界平和は分かるけど、カルピスをどうしたいの」

「また飲めますように」

そんなに気に入ったのか。やっぱりカルピスは偉大^{だい}だな。夏は感心した。

世界平和とカルピス。かなり妙な取り合わせだけれど、何か心を動かされる。

「七夕はカルピスの日なんだよ」

かき氷を持ってきたとうさんが、そう言った。

「カルピスはじめて発売されたのが、七月七日だったから」

「ええっ、ほんと？」

「カルピスの水玉のパッケージあるだろ？ 天の川をイメージしているんだって」

夏は驚いた。偶然^{ぐうぜん}にしてはよくできている。でも、人生はそういうことだらけだとも夏は思う。生まれたこと、生きているこ

と、すべてが偶然で、よくできている。「生まれる」と「生きる」が同じ漢字であることもやっぱりよくできている気がする。

その時、百花が言った。

「あたし、シキってよくわかってなかった」

「え？」

「指揮者のことかと思った。それか、死ぬ時期のことか」

指揮と死期、頭の中で変換^{へんかん}しながら、夏は思い出した。この前、春夏秋冬について聞かれ、わざと「季節」ではなく「四季」という答え方をした。そのほうが大人びて聞こえると思ったのだ。それが百花を混乱させたらしい。

「世界には四季のない国もあるんだよ」

とうさんが夏に言う。そうなのかと、夏は思った。

「今は夏の季節ってことね」

百花の言う「夏の季節」というのが果たして自分の名前を指しているのかどうか、とても重要なことなのに、夏には判断しかねた。でも、どう聞き返してよいやらわからず、何も答えられない。

「夏、あたし、好きみたい」

今度は季節のほうを指しているのだと、さすがにわかった。

「ぼくも。でもぼくは冬生まれなんだ」

そう言ってみただけれど、これもまた百花には理解されなかった。生まれた季節の名前をつけるとのこと自体が、ピンとこないのかもしれない。

「つめたくて、おいしい」

百花はかき氷をゆつくりと味わって食べた。そんな百花を見ながら、とうさんは言った。

「初恋^{はつこい}の味、カルピス」

「やめてよ」

思わず反応した夏を、とうさんはきょんとして見る。そして、にやっと笑った。

「昔のキャッチコピー(宣伝のための言葉)だよ、カルピスの。おまえの話じゃない」
はめられた。最悪だ。

「カラダにピース、じゃないのかよ」

¹³「あれ隠しに強気で言ってみたけれど、百花の顔を見ることができない。とうさんは続けてこんな話をした。」

「夏のひいおじいちゃんが、戦争から日本にもどった時の話だけ」

「ひいおじいちゃん、戦争行ってたの？」

夏はそれすら知らず、驚いた。

「戦地から家に帰って、まずカルピスを飲んだらしい。甘酸っぱくて、平和の味がする。そう思ったって」

ひいおじいちゃんは、夏が赤ちゃんのころに亡くなっている。

「そんなに昔からあるの、カルピスって。戦争より古いの？」

「そう、百年くらい前からあるんだよ」

「すごい」

「古いねえ」

最後にしろくまの耳を作っていた杏あんずを口に入れ、百花は「おいしかったあ」と笑った。

「これ、持っていたら。いいよね？　とうさん」

夏がカルピスのボトルを指して言くと、とうさんは「もちろん」とうなずいた。百花は少し迷うようなそぶりを見せたが、最終的に首を横に振った。

「かさばるから」

夏はかさばるという表現を知らなかった。物が大きくて場所を取ることだ。でも、四季もカルピスも知らない百花に、日本語の意味を尋ねるのは癪しやくだと思い、黙っていた。

「パパは言ったわ」

「え？」

「カルピスを飲むあたしを見て、日本にもどってよかったと思ったって」

すると、とうさんが百花に歩み寄り、百花の手をとると、その手にカルピスを持たせた。

⁹「だったらやつぱり、持っていきなさい。きみのパパのために」

百花は少し考えたあとで、「そうね」と笑った。

「そろそろ帰るね」

ポーチから小銭こぜに入れを出そうとした百花に、とうさんが「いいよ、いいよ。夏んとこに遊びにきたんだから」と断った。

いや、違う。百花は単に「しろくまさん」を食べにきたただけだ。そう思ったけれど、そう言ってしまうと、遠回しにお金を払えはらえと言ってしまうことになり、これはたいへん複雑な状況であるなと夏は思った。

「いいのかな？」

百花が言うので、

「いいんじゃない？」

と答えた。それで充分だ。

ふたりで外に出ると、かし切りパーティーの団体客がちょうど来たところだった。そのうちのひとりには¹⁴ジョウレン客で、百花と

一緒にいる夏をからかった。夏は内心で「うぜえ」と思ったが、なんとか顔に出さなかった。見上げると、夏の空はまだ明るい。

「今日は晴れているから、天の川が見えるかも」

「ミルキーウェイ」

夏はわからなかった。天の川のことだろうか。

「ミルキーウェイって、天の川？ ……牛乳の道？」

「そう。なんでそういうのか知らないけど」

英語圏では川ではなく道なのか。ふしぎだなと夏は思った。ミルキーというところが、なんとなくカルピスを連想させる。

「じゃあね」

「うん」

行かないで。そう言えるほど、夏にとって大きな気持ちではなかった。それでも、二度と会えない可能性が高いのだと思うと、かなしかった。織姫と彦星ほどのチャンスも残されていない。

連絡先を聞いてみようと思ったが、百花は電子機器のタグイを一切持っていないようだった。きっと必要ないのだ、これから向かうようなところでは。

ふたりの間に風が吹いた。百花は乱れた長い髪を、うつつうしそうにかき上げた。

「無事でね」

旅に出るのは百花のほうなのに、別れ際にそう言われた。夏はうなずいた。

喉元まで出かかった気持ちは、とうとう言葉にはならなかった。

百花を見送ったあと、店に戻り、夏はどうさんに聞いた。

「短冊の願い事って、ひとりで何枚書いてもいいんだよね？」

ついさっきまで百花が手にしていたペンを取り、夏はたった今できたばかりの新しい願い事を書き足す。

夏はまだ始まったばかりだということを、ふいに思い出した。

(戸森しるこ『夏と百花とカルピスと』)

問1 線部1～15のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 線部①「七夕が世界共通のイベントではないことを、夏は幼いころから知っている」(2ページ)とありますが、それはなぜですか。三十字以内で答えなさい。

問3 ……線部A「物心がついてから」(3ページ)・B「舌を噛みそうな」(6ページ)とありますが、この言葉の本文中の意味として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 「物心がついてから」(3ページ)

- ア 経験を積んで人との付き合い方が分かってから
- イ 世の中のことが何となく分かってきてから
- ウ 勉強することによって色々な知識が増えてきてから
- エ 成長にともなう物へのこだわりが出てきてから
- オ 自分の状況を冷静に判断できるようになってから

B 「舌を噛みそうな」(6ページ)

- ア 思い浮かべるだけでも不愉快な
- イ なめらかに発音するのが困難な
- ウ すっと頭に入って来ない
- エ 強い驚きですぐには声が出ない
- オ 言葉に出すのはためられる

問4 — 線部②「どちらを観光……、いや、どちらに滞在たいざいされますか？」(4ページ)とありますが、夏の父親はなぜ「観光」を「滞在」と言い直したのですか。六十字以内で答えなさい。

問5 — 線部③「『あ、そう』と拍子ひょうしめ抜けした」(4ページ)とありますが、それはなぜですか。四十字以内で答えなさい。

問6 — 線部④「夏は顔をしかめるしかできない」(5ページ)とありますが、ここでの夏の様子の説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 夏には関係ないと思っていた戦争が急に身近に感じられたので、恐ろしくて言葉を出すこともできないでいる。

イ 夏は百花たちの国で始まりそうな戦争について何も知らなかったのだ、それを恥はずかしく思うことしかできないでいる。

ウ 小学生の夏は戦争を止める力を持っていないので、戦争の当事者たちを憎にくむだけで何もできないでいる。

エ 夏には戦争についての詳しいことがわからないので、戦争はいやなことだと表情で表現することしかできないでいる。

オ 戦争と聞いても夏には直接関係がないことなので、そのような話題が面倒めんどうだとしか感じられないでいる。

問7 — 線部⑤「その半分は、あなたみたいな子どもなの」(7ページ)とありますが、ここでは遠い国のことと目の前にいる夏のことを結びつけて考えています。百花の家族が訪ねてきた場面でも、母の心中でそれらは結びついてしまったと思われるます。そのことが行動として表れている一文を探し、はじめの七字を答えなさい。

問8 — 線部⑥「せりふのしらじらしさに、思わず赤面してしまいそうになる」(8ページ)とありますが、この時の夏の気持ちを八十字以内で答えなさい。

問9 — 線部⑦「クラスの女子に多い、まるで小さなくせのある文字ではなくて、大きくて勢いのある、流れるような文字だった」(10ページ)とありますが、夏は百花の人柄ひとがらをどのように考えていますか。この部分やその他のクラスの女子についての記述をふまえた上で、最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア クラスの女子が周りの子とのなれ合いの中にいて口うるさいのに対して、百花は周りを気にしないで自分の思いを飾かざらずに表現する純粋じゆんすいな人柄である。

イ クラスの女子が異性の目ばかり気にして陰かげでうわさをするのに対して、百花は厳しい環境かんきやうをくぐりぬけたゆえの物怖ものおじをしない堂々とした人柄である。

ウ クラスの女子が思ったことを何でも率直そつちよくに表現し思慮しりょが足りないのに対して、百花は目前に起こる事柄ことがらに慎重しんちやうに向き合う人柄である。

エ クラスの女子が物の豊かな生活に慣れて無感動になってしまっているのに対して、百花は何事も新鮮しんせんな気持ちで受け止められる人柄である。

オ クラスの女子が感情に任せて自分の欲求を強く主張するのに対して、百花はいつも遠慮えんりょがちで自分の思いをはっきり言わず他人に譲ゆずる人柄である。

問10

——線部⑧「とうさんはきょんとして見る。そして、にやっと笑った」(12ページ)とありますが、この時のとうさんの様子を説明したものとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア「初恋の味」という表現のうまさにただただ感心し、思わずつぶやいてしまったが、突如として夏と百花の今の関係にびつたりだと確信し、会心の笑みがもれた。

イ「初恋の味」という言葉を軽い気持ちでつぶやいたら夏が怒りをあらわにしたことに驚き、繊細な夏をからかってしまったことを笑ってごまかそうとした。

ウ夏の否定の言葉を聞いて何を言いたいのかすぐには分からなかったが、夏の様子を見て「初恋の味」という言葉が隠れた気持ちを言い当てていると直感し、思わず微笑んだ。

エ百花が「しろくまさん」をゆつくりと味わって食べている美しい姿に感動し、何気なく「初恋の味」と言ったのに、夏はなぜか百花との恋愛をイメージしたので滑稽に思った。

オ「初恋の味」という言葉は過去の自分の思い出を語ったものにすぎないのに、それが予想外に夏の心に響いたことに驚き、ついうれしくなってしまった。

問11

——線部⑨「だったらやっぱり、持っていきなさい。きみのパパのために」(13ページ)とありますが、とうさんはなぜこのように言ったと考えられますか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

アカルピスを飲む百花を見てよかったと思ったという話をきいて、いつ命を落とすか分からないような状況で生活してきた、改めて生きていることの価値に気づいた父親の思いに共感したから。

イカルピスを飲む百花を見てよかったと思ったという話をきいて、幼いころから異国での生活に慣れきってしまった百花に、日本の心を教えたいという父親の願いが感じられたから。

ウカルピスを飲む百花を見てよかったと思ったという話をきいて、世界の子どもたちのことを思うと、日本に帰りたくても簡単には帰れない父親の苦しい胸の内が伝わってくるようだったから。

エカルピスを飲む百花を見てよかったと思ったという話をきいて、様々な地域を渡り歩く生活のなかで、つねに持ち物を切り詰めなければならなかった父親の無念さが理解できたから。

オカルピスを飲む百花を見てよかったと思ったという話をきいて、厳しい社会状況のなかを生き抜いてきて、いつも我慢を強いてきた百花を思う父親の気持ちが示されていると思ったから。

問12 夏の行動と百花への思いについて説明したものととして、ふ・さ・わ・し・く・な・い・もの・を・二・つ・選・び、記号で答えなさい。

ア 夏は百花の名前をかわいと言ったけれども、これは父の言いつけによる接客サービスであり、特に気があるとは思っていないかった。

イ 百花の住んでいた国を調べたのは、百花の家族が日本人か外国人か気になっただけでなく、同級生の女の子とは違う独特の雰囲気を持つ百花に心引かれ始めていたからである。

ウ 夏がその夏、例年よりカルピスを飲んだのは、百花がカルピスを知らなかったことに驚いただけでなく、それにも増して百花のカルピスを飲む様子が魅力的だったからである。

エ 百花にはじめて名前を呼ばれたときに呼び捨てにされドキドキしたのは、何の遠慮もなく自分の心に踏み込まれたように感じ、緊張したからである。

オ カルピスのボトルをあげようとしたところ百花に断られ、重ねて勧めることはしなかったが、それは「かさばる」という言葉から百花の生活の様子を直感したからである。

カ 百花が明日発つと伝えにきた日の別れ際に、二度と会えないと思うとかなしかったが、夏自身はそれが恋心であるとは感じていなかった。

問13 —線部⑩「夏はたった今できたばかりの新しい願い事を書き足す」(14ページ)とありますが、文脈をふまえた上で、自分が夏の立場になってその願いごとを書きなさい。

問14 ~線部「世界平和とカルピス」(10ページ)とありますが、「カルピス」は「世界平和」との関連においてどのようなものとして描かれていますか。本文中の具体的なエピソードに触れながら百字以上百二十字以内でまとめなさい。

